

# 戦前におけるキリスト教主義幼稚園の保育者と留学

—エリザベス・ハリソンの学校に学んだ人たち—

小澤 由理

## 1. はじめに

本論文は、戦前日本において多くのキリスト教主義保育者養成校の関係者が学んだアメリカ・シカゴにあるエリザベス・ハリソン (Elizabeth Harrison, 1849-1927) の学校を取り上げ、1880年代から1930年代における彼女たちの留学の実態の一端を明らかにすることを目的としている。

エリザベス・ハリソン (1849-1927) とは、19世紀後期のアメリカの幼稚園運動の指導者の一人であり、アメリカの幼児教育の専門職者養成に尽力したパイオニアである。ハリソンは、20世紀初頭の国際幼稚園連盟 (International Kindergarten Union) でのフレーベル主義をめぐる保守派対進歩派の論争において、保守進歩派といういわゆる中道の立ち位置を示し、心理学とフレーベル主義に基づく幼児教育と母親教育を推進した人物として知られている<sup>1)</sup>。

ハリソンの保育思想とその実践は、その知古であった頌栄幼稚園および頌栄保母伝習所のハウによって日本のキリスト教系保育者養成学校や幼稚園に紹介され、多くの女性宣教師や日本人保育者がハリソンのもとを訪れ学んだことが、各学校の年史やJ K U年報に記されている<sup>2)</sup>。それは明治初期から日本に移り住んだ女子宣教師らは、他国の最新の保育動向や新たな教育的知見を得るために、ミッション団体から支給される一時休暇 (Furlough) を利用してしばしば母国やその他の国の教育施設を訪れたからである。また彼女たちの後継候補とされた日本人女性保育者に対しても、管理職養成の一環として留学の門戸が開かれたからである。しかし実際にどのような人物がいつハリソンの学校を訪れたのかという全体像や留学の諸実態はあまり明らかにはなっていない。

そこで筆者は2022年度の総合文化研究所の研究助成を受けて、2023年8月末～9月初めにかけてシカゴのNational Luis University (以下、NLU) 内にあるThe NLU Archives and Special Collectionを訪れ、そこに所蔵されたハリソンの学校関係の史資料を検討し、ハリソンの学校に学んだ留学生たちを可能な限りに明らかにする調査を行った。本調査ではThe NLU Archives and Special CollectionのアーキビストのMeghan Ryan氏の協力により、ハリソンの学校の発行した科目一覧 (Course Catalogue) を1913年～1939年まで調査し、一覧に記載された学籍名簿において日本からの留学生について確認した。(すなわち明治期、大正期、昭和期の日本からの留学生について確認することができた。) またハリソンの学校で発行した学内誌 *New Bulletin*, vol.1, no.1, 1912. ～ vol.9, no.2, 1922. とその後続誌 *Our guidon*, vol.1, 1923. ～ vol.17, 1946. の記事 (*Faculty News*, *Alumnae News* など) を検証し、多数の日本に関する情報や日本からの書簡の一部が記事として掲載されていることを確認した。これらの雑誌は学校関係者やアメリカ全土で幼児教育に関わった

卒業生たちに配布されたもので、記事には現在在籍する留学生の様子や、帰国した留学生が自らの近況や思いを綴った書簡の一部が紹介されていた。これらの記事が物語るのは、いわゆるハリスンの学校の同窓会コミュニティのネットワークにおいて、日本からの留学生の存在は歓迎され、書簡のやり取りを通じた交流を行っていたことが伺えるものであった。すなわち、日本では知られていなかった日本とハリスンの学校の間における長きに渡る国際交流の在り様を示すものであった。

これまで多くの保育史研究では、女性宣教師の一時帰国や、日本人保育者の海外留学をあくまで各学校のカリキュラムの発展史や個人史のなかに位置づけてきたが、留学とは知識や技法の与え手から受け手へ一方的な影響を残すものではない。ハリスンの学校の学内誌に掲載された記事の存在は、留学生の存在はハリスンの学校の歴史の一部であることを物語るものである。この点について、ドイツとアメリカを横断するトランスナショナルな幼児教育史を研究したアレンが指摘するように、「幼稚園教育の伝達とは・・・二つの国の間で与え手と受け手の役割は交互に入れ替わる、複雑で長期的な“絡まった関係” ‘entangled relationship’」<sup>3)</sup> が存在するのである。留学を通じて所属や宗派、出身国を超えて多くの人々が出会い、互いに影響を受けることで生じた、この絡まった関係こそ、保育におけるトランスナショナルな諸関係を生み出してきたと考えられる<sup>4)</sup>。

そこで本論文では、これら留学生に関する学内誌の記事の一部を取り上げながら、ハリスンの学校における日本からの留学生の受け入れ状況を示すとともに、日本からの留学生がどのようにハリスンの学校の人々と交流したのかという日米双方の視点から彼女たちの留学の実態についてトランスナショナルな考察を試みたい。以下、まず本論文ではハリスンの学校についてその創立から1930年代までの概略を示しながら、ハリスンの学校と日本とのトランスナショナルなネットワークの構築について言及し、次にハリスンの学校の日本からの留学生の受け入れ状況について明らかにする。続いて学内誌の記事の内容から、留学生たちの交流の在り様について取り上げた考察を行う。

## 2. エリザベス・ハリスンの保育者養成校

まずは以下に、ハリスンおよびハリスンの保育者養成校のたどった系譜について1880年代から1930年代まで簡単に記しておこう。

ケンタッキー州出身のエリザベス・ハリスン（1849-1927）は、19世紀後期のアメリカの幼稚園運動の指導者の一人であり、アメリカの幼児教育の専門職者養成に尽力したパイオニアである。ハリスンは1879年に移民増加による市民生活の多様化や、家庭経済格差に問題を抱えたシカゴで、幼稚園運動の先駆者であったアリス・パトナムから学び、1884年にハリスンはパトナムとともにハリスンは現職教員研修と、フレーベルの『母の歌と愛撫の歌』（Mother Play）に強い影響を受けた母親学級に始め、1886年に自らの保育者養成コース（Miss Harrison's Training School）を始めた<sup>5)</sup>。ハリスンはその後も学校の拡充に努め、1889年にはシカゴ・アート・インスティテュートに保育者養成校（Chicago Kindergarten Training School）を創設し、1894年には学校をChicago Kindergarten Collegeとして、保育者養成を行う女子高等教育機関に成長させた。

このようなハリスンのキャリアの下地は、彼女が当時のフレーベル主義幼児教育をリードする国

内外の人物から直接学ぶことのできた、トランスナショナルな経験があった。ハリスンは学校を創設した1880年代にはセントルイスのスーザン・ブローヤニューヨークのクラウス・ベルテから学びを受け、1890年にはドイツを尋ねてマーレンホルツ・ビューローやフレーベルの姪のシュレーダーに学び、彼女は自身のフレーベル主義の考え方を深化させた<sup>6)</sup>。やがてハリスンは、20世紀初頭の国際幼稚園連盟（International Kindergarten Union）で、保守進歩派としてフレーベル哲学と心理学的研究を重視した独自の保育思想を展開したのだった<sup>7)</sup>。この意味でハリスンの学校は、心理学とフレーベル主義に基づく幼児教育および母親教育を推進する保育者養成学校としての特徴があった。

1900年代にはいと、ハリスンの学校はアメリカの保育・教育研究の進展や社会情勢に合わせるように、数度の学校名の組織改編と改称を行い、アメリカ全土に卒業生を送る名門保育者養成校として発展させた。1912年にはNational Kindergarten Collegeと改称し、1917年に母親学級の整備化と教育／保育研究を行うための教育施設として付設の小学校・幼稚園（Children's School）を設置し、1918年にNational Kindergarten and Elementary Collegeとして学校名を改称している<sup>8)</sup>。この時のハリスンは60才を過ぎていたが、1912年にイタリアに出向き、1914年に『モンテッソーリ・メソッドと幼稚園』を出版し、海外の新しい保育潮流を視野に持ったアメリカ保育業界の重鎮として活躍した。

1920年にハリスンは校長職を引退するが、彼女は後継として教え子であり、付設小学校の設置に尽力したエドナ・ベーカー（1883-1956）を二代目校長に就任させた（校長在職期間：1920～1949）。ベーカーはアメリカのセブンススターズに名を連ねたノースウェスタン大学で古典学を学び、その途中で教育者を志してハリスンの学校に入学した。ベーカーは1908年にハリスンの学校を卒業すると、一年ほど私立幼稚園で教諭や管理職を経験したのち、1917年まで妹のクララとともに、後の付設小学校となるエバンストン小学校（Evanston elementary school）の校長として活躍した。ベーカーが校長になるにあたっては、このような経歴だけではなく、彼女は1920年にノースウェスタン大学へ戻り学士を取得すると、翌1921年に修士号を取得し、養成校の管理職にふさわしい学歴を準備した。若干37歳で校長に就任したベーカーは、さらなる学校の拡充に寄与した。まずベーカーは1925年にかつての学校の理事であったジェーン・アダムズのハル・ハウス内にあったメアリー・クレーン・ナーサリーが廃園寸前であったことを受け、自校の付設施設として復興させ、地域の保育施設の拡充に力を入れた。また1930年にはハリスンの学校を2年制から学士を取得できる4年制カレッジに改組し、学校名もNational College of Educationに改称した。ベーカーが新学校を設立した時勢はちょうどアメリカ大恐慌時代であり困難な学校経営を強いられたが、ベーカーは新設校を引き継いだ勢いのまま国内外の交流には積極的に活動した。1931年にはIKU主催のヨーロッパ滞在ツアーに学内の教職員を連れ立って参加し、1932年にはJKU年次大会の特別講師としてベーカー姉妹は来日している。翌1933年にはベーカーはIKUと全国初等教育評議会（National Council of Primary Education）が統合された教育団体Association for Childhood Education（現Childhood Education International）の会長に就任し、アメリカ国内外の幼児教育推進のリーダーとして活躍

した<sup>9)</sup>。

### 3. ハリスンの学校と日本のキリスト教主義幼稚園のつながり

それではハリスンの学校と日本とはどのようなつながりがあったのだろうか。本論文では、ハリスンの学校が留学生を受け入れた背景として、日本におけるキリスト教主義幼稚園の発展により、人々をつなぐ地理的なネットワークが広がったことを指摘したい。

まず日本のキリスト教主義幼稚園や保育者養成校に大きな影響を与えた神戸の頌栄保母養成所・幼稚園の創設者アニー・ハウ（Annie L. Howe）の存在がある。ハウはハリスンと同じアリス・パトナムの学校の出身で、ハウが1876年、ハリスンが1879年に入学した。ハウが日本へ渡来したのちにも、両者の関係は続き、互いの著書のなかで互いの功績を認め合う仲であった。ハウは一時帰休でアメリカに戻った際、ハリスンから母親教育の実践について伝え聞いて、頌栄幼稚園にハリスンの著書や保育思想が持ち込まれ、そこでの保育実践に影響を与えたとされている<sup>10)</sup>。ハウが留学後に日本にもたらしたハリスンの著作とは *A Study of Child-Nature* (1890) である。本著はハリスンが母親学級向けに講義した家庭での育児法をまとめたもので、幼稚園教育と家庭教育の懸け橋となる著作として、数か国語に翻訳出版された人気書である。この本は、1903年に頌栄保母伝習所のテキストとして翻訳され、広島女学校では1907年に松本春江訳『児童研究』として福音社から出版し、広島女学校付設幼稚園の母の会でも活用された。また活水女学校でも高森ふじが翻訳をなして、テキストとして活用した<sup>11)</sup>。このような一つの書物をめぐる西日本地区における地域的 (regional) なネットワークの中で、女性宣教師や日本人保育者は著者であるハリスンへの憧れを育んだに違いない。後述する翻訳者である和久山キツ、高森富士がハリスンの学校を訪れたことは偶然ではないだろう。

ハリスンの著書をめぐる地域的なネットワークは、日本に渡来した女性宣教師たちの作った日本基督教幼稚園連盟 (Japan Kindergarten Union) によって全国的なネットワークに拡張し、やがて日本とハリスンの学校をつなぐ国境を越えた (transnational) ネットワークが広がっていく。ハウが長年会長を務めた本連盟は、1892年にアメリカで発足した万国キリスト教幼稚園連盟 (IKU) に加盟することが創設当初から目指されたものであった<sup>12)</sup>。IKUは、創設時からハリスンがメンバーとして参画し、国際規模での幼稚園運動や国際交流に貢献する保育者団体として機能していた。(例えば1912年にハリスンがイタリアに出かけたのはIKUによるローマ派遣があつてのことであった。) 1904年のセントルイス年次大会で小学校部会との共同部会で、ハウの報告論文「日本の幼稚園」、*'The Kindergarten in Japan'* が報告されている<sup>13)</sup>。日本基督教幼稚園連盟は、このハウの働き掛けもあり、1907年に日本支部として承認されると、IKUにおけるアジア圏での国際的なポジションを確保した。IKUに加盟する幼稚園のほとんどがアメリカであった当時において、JKUが日本支部となったことは、アジア圏におけるキリスト教宣教の成功を印象付けるものであり、このことが積極的な日米間における幼稚園教育の実践の国境を越えた (transnational) なネットワークを育てることとなった。IKUは1910年代に海外支部の協力委員をIKUの年次大会や理事会に対面での参加と報告を求め、



1915年には日本での一か月滞在ツアーが企画されるなど、保育における国際交流を重視する路線を打ち出した<sup>14)</sup>。1918年には頌栄幼稚園の和久山キソが日本支部の代表としてIKUの年次大会に参加し、アメリカでの保育者との直接の交流を果たす機会に恵まれた。この機会こそ和久山がハリスンの学校を訪れる機会をも運んだ。

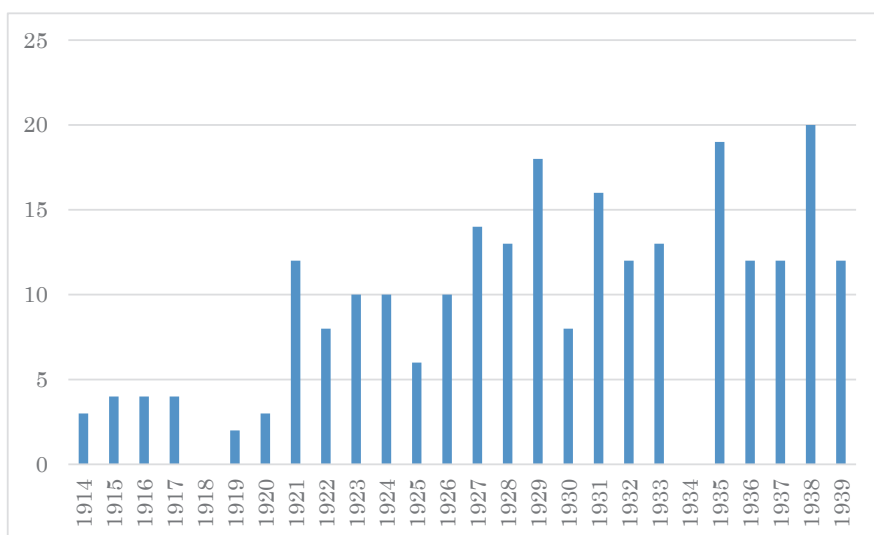
1930年代には、ついにIKUのネットワークを通じてハリスンの学校の二代目校長自身が日本へと招聘される。1933年には二代目校長のベーカーが日本キリスト教幼稚園連盟の特別講師として日本の年次大会に参加し、ベーカー来日の様子や講演の内容はJKU年報に記載された<sup>15)</sup>。この背景にはハリスンの学校の卒業生であった東洋英和女学院のレーマンの存在があった。後述するが、レーマンは1920年代から1930年代にかけてベーカー校長とは長きに渡り関係を持ち続けた。このような日本との人的つながりが影響したのか、ベーカー校長時代のハリスンの学校の理事の名誉会員には、ジェーン・アダムズ（シカゴ・ハルハウス）、パティ・ヒル（コロンビア大学）、ウィリアム・キルパトリックに並び、アニー・ライオン・ハウ（神戸・頌栄幼稚園）の名前が、そして自由学園の羽仁もと子（東京・自由学園）の名前が1934年のコース・カタログに記載されている<sup>16)</sup>。ハリスンの学校がどのようにこれらの人々を招いたのかは今後の調査課題とするが、ベーカー校長時代の学校経営においては、学校内外の著名な人的ネットワークを頼りに、日本からの学校関係者が歓迎されていたことが伺える。

#### 4. ハリスンの学校と日本からの留学生たち

それではハリスンの学校ではどれほどの日本からの留学生を受け入れたのだろうか。その前提として、ハリスンの学校の留学生全体の受け入れ状況について確認したい。ハリスンの学校はその発展期において、著名な保育者養成校としてアメリカ全土からミドルクラス層の家庭の女学生を集めることに成功した。その一方でベーカーが校長になると他国からの留学生も積極的に受け入れるようになった。表1は1913年～1939年の年間科目一覧表（Course Catalogue）に記載された学籍名簿を基にハリスンの学校の留学生数の推移を示している。

このグラフからは、ハリスンが校長を務めた1910年代の留学生は数名だったが、1920年代から留学生数が増えていることがわかる。この過程は1930年代にベーカーが海外へと出向き、国際的な関係構築や交流に尽力した行動と重なり合う。ハリスンの学校には、カナダ、フランス、ドイツ、オーストラリア、チェコ、エストニア、ブルガリア、ポーランド、メキシコ、プエルトリコ、バルバドス、フィリピン、韓国、中国、ハワイ、日本など、20か国から留学生が訪れていたが、このうち最も多いのがカナダからの留学生で、アメリカの隣国として比較的簡略な留学手続きが認められていたからか、80名以上が在籍していた。注目すべきは、三番目に数が多いのが日本からの留学生が17名でハワイからの留学生の10名以上が日系アメリカ人であったことだ。ハリスンの学校では、日本からの留学生および日系の留学生が多かったことがいえる。

表1 1913～1939年留学生数の推移



出典：NLU special archivesに所蔵される *The Course Catalogue* (1913～1939) から筆者が作成した。なおこのグラフには1918年と1934年については欠番のため、データはない。

次に日本からの留学生や訪問者の詳細について確認したい。表2は学籍名簿が掲載された年間の科目一欄表に加えて、学内誌 *New Bulletin*, vol.1, no.1, 1912. ～ vol.9, no.2, 1922. とその後続誌 *Our guidon*, vol.1, 1923. ～ vol.17, 1946. の記事 (Faculty News、Alumnae Newsなど) の調査の結果、在籍期間と人物の特定ができた日本からの留学生17名についてである。

表2 ハリスンの学校の日本からの女性宣教師と日本人保育者たち

在籍者名	所属	在籍期間
Nannie・B・Gaines	広島女学院、ランバス女学院 (Methodist Episcopal Church, South)	1893年-1894年、1915年
Tomi Tachibana		1932年 (Mid Year)
Alice L.Coates	浜松常盤幼稚園 (Methodist Protestant)	1902年、1911年 (Sp)
Annie Howe	頌栄保姆伝習所 (後の頌栄保育専攻学校) (American Board)	1913年 (SS)
和久山キノ		1918年 (SS)
スダ マサコ		1940年 (Sr)
高森 フジ	活水女学校 (Methodist Episcopal)	1915年 (Sr)
Lucy Russell		1917年 (Fr) 1926年-1928年 (Sr)
Lois Lehman	東洋英和女学院 (Canadian Methodist)	1922年 (Jr) 1928年 (Sr)
功刀 ヨシコ		1932年-1935年 (Sr)
Fern Scruton		1932年-1933年
Marie Staples		1934年-1935年
Eleanor Jost		1934年-1935年
Margaret Hester		1939年 (Jr)
ナミカワ カツ	親愛幼稚園 (American Episcopal)	1930年-1931年

出典：NLU special archivesに所蔵される *Course Catalogue*, 1913.～1939.、*New Bulletin*, vol.1, no.1, 1912. ～ vol.9, no.2, 1922.、*Our guidon*, vol.1, 1923. ～ vol.17, 1946. から筆者が作成した。

表内の在籍者名は原文のままである。( ) 内は在籍したコース課程を示しており、それぞれFr.はFreshersコース(1年制)、Sr.はSeniorコース(2年制)、SSはSummer School、Sp.はSpecialコース(1年制専門コース)である。1年制コースでは幼稚園教諭資格取得コースであり、シニア・コースは現場での経験を積んだ幼稚園教諭が現場での指導者となるためのコースであった。毎年行われるサマー・スクールには、ハリスンを始めとする学校の講師による講座が一般に開放されるので国内外から多くの人々が参加することができた。

これら留学生の日本での所属先はすべてJKUに加盟した幼稚園もしくは保育者養成校である。広島女学院(ランバス女学院を含む)(Methodist Episcopal Church, South)が2名、浜松常盤幼稚園(Methodist Protestant)が1名、頌栄保姆伝習所(後の頌栄保育専攻学校を含む)(American Board)が3名、活水女学校(Methodist Episcopal)が1名、大阪信愛幼稚園(Baptist)が1名、東洋英和女学院(Canadian Methodist)が5名、親愛幼稚園(American Episcopal)が1名である。これらの留学生は、いずれも所属先の幼稚園園長、主任保姆、保姆養成校の学校長又は教員、JKUの主要な委員など重要なポストについた人物たちである。留学生の在籍期間が、1か月～2年間と比較的短期間であるのは、所属先の現職教員の一時休暇を利用した学びであったからと考えられる。

## 5. 帰国後の留学生たちの書簡

帰国後の彼女たちは、アメリカで得た見識をもとに、所属先の新園の創設や幼稚園の管理職、保育者養成校の教員として活躍をした。とりわけ日本人3名は、帰国直後に所属先の幼稚園の園長や保姆養成科の教員に抜擢されている(ハリスンの学校での留学が、彼女たちの大きなキャリア資本となったことは間違いないだろう)。これらの留学生は、帰国後もハリスンの学校と継続的な交流を望み、校長あてに自らの近況について多くの書簡を送った。先に示したハリスンの学校の学内誌 *New Bulletin* とその後続誌 *Our guidon* の記事(Faculty News、Alumnae Newsなど)を調査したところ、ほとんどの号に帰国後の留学生たちからの書簡を紹介する記事欄があり、海外での自身の保育実践の取り組みや出来事を紹介したり、自身の近況(結婚や就職、家族、近隣のハリスンの学校関係者に関する出来事)が伝えられていた。

日本からの書簡や写真の掲載はその数が多く、学内誌の号によっては日本だけの特集が組まれたページも発見された。管見では全55件の日本に関する記事を抽出できたので、表3としてこれらの書簡の数をまとめた。

先に示した表2から、日本からの留学生を受け入れは1910年代に一つのピークがあり、ベーカー校長時代の1930年代にもう一つのピークが訪れており、このピーク時と学内誌に掲載された日本からの書簡数のピークは重なっている。以下これらピーク期に当たる1910年年代のハリスン校長時代および、1930年代のベーカー校長時代に紹介された学内誌の書簡の一部を取り上げる。

表3. 日本からの書簡数の一覧

在籍者名	所属	書簡数 (学内誌掲載)
Nannie Gaines	広島女学校	8
Alice L.Coates	浜松常盤幼稚園	3
Annie Howe	頌栄保姆伝習所 (頌栄保育専攻学校)	1
和久山 キソ		6
スダ マサコ		2
高森 フジ	活水女学校付設幼稚園	2
Lucy Russell		3
Lois Lehman	東洋英和女学校付設幼稚園	10
功刀 ヨシコ		1
Fern Scruton		1
Marie Staples		2
Eleanor Jost		2
Margaret Hester	親愛幼稚園	2

出典：NLU Archives 所蔵の *New Bulletin*, vol.1, no.1, 1912. ～vol.2, 1922., *Our guidon*, vol.1, 1923. ～ vol.17, 1946. から筆者が作成した。

#### (1) ハリソン校長時代の日本からの書簡

ハリソンが学校長を務めた時期（1887年～1919年）にはハリソン学校はすでに全米から学生が集まる有名校に成長したが、1890年代には諸外国からの留学生はまだ数少なかった。しかし日本からの最初の留学生はこの時期に訪れている。当時、広島英和女学校の校長ナニー・ゲーンズであった。女性宣教師ゲーンズは広島英和女学校に赴任以来、ハウから助言や支えを受ける関係であり、ゲーンズは1892年の付設幼稚園の創立に際し、幼児教育を学ぶために1893年にアメリカに渡り、ハリソンの学校に学んだ。ゲーンズはこの一度目の留学を終えた後、日本に帰国するが、再びハリソンの学校を訪れることになる。それが第一次ピーク期にあたる1915年だった。1914年第3巻第一号の記事には、ゲーンズが翌年のサマー・スクールの出席予定であることが掲載された。以来、学内誌には1914年～1928年の間にゲーンズがハリソンにあてた書簡が掲載されており、いずれもハリソンへの敬意や、日本での保育者養成に関する自身の考えなどを伝えている。興味深いのは、ゲーンズとの交流によって、ハリソンの学校が日本にいる女性宣教師たちが育てたアジア人の保育者を留学生として受け入れるようになったことだ。学内誌には1915年にゲーンズが校長を務める広島女学院保母科の卒業生で中国出身のグレース・イー（Grace Yee）と長崎県の活水女学校付設幼稚園主任保母である高森富士であり、二人は教職経験者のコースであるシニア・クラスに入学したと伝えている。この年は前年に第一次世界大戦が勃発し、各国間の緊張が続く不穏な時期であった。1915年1月に発行された学内誌 *New Bulletin* には、1914年に勃発した第一次世界大戦についてハリソンは、「戦争から得られる教訓」と題した講演を行い、戦争状態にある各国の状況に対して保育に携わる女性こそキリスト教精神に則った真の理性的な存在となるべきだと唱え<sup>17)</sup>、その年の最



初の社会的なイベントで日本からの2人の留学生を歓迎したことを報じた (*New Bulletin* 1915年 Vol.3 No.2)。この記事には、留学生として初めて日本人である高森の日本でのキャリアが詳しく記載され、ハリスンの著書「*Study of Child Nature*」を邦訳し、今やMiss Blowの*Commentary on the Mother Play*を翻訳している」人物として紹介された。

また同記事には、二人の所属したシニア・クラスの集会での様子も詳細に伝えた。まずゲーンズが講師として招かれ、日本の広島女学校での宣教と幼稚園教育について「遠い日本の興味深い状況について」講演を行ったことが伝えられた。続いて広島女学校の卒業生であるグレース・イーが「ゲーンズの教員養成事業について（学生から）の質問に応えた。我々は彼女の経験（談）を実に楽しむことができた」と書かれている。またその集会では高森はスピーチを求められ、日本の幼稚園教育が如何に上手く運んでいるのかを述べ、日本の幼稚園で過ごす生き生きとした子どもたちの様子はアメリカで見学した幼稚園の子どもたちの様子と少しも変わらない、と述べた様子が報じられた (*New Bulletin*, vol.3, no.2, 1915.)。11月5日には、高森の恩師である活水女学校のメアリ・コーディが、フィリピン、韓国、日本での自身の宣教について経験談を講演したと記されている。これらの記事はゲーンズら女性宣教師が、派遣先の日本の基督教伝道と幼稚園教育の普及に勤めていることを伝えた (*New Bulletin*, vol.3, no.2, 1915.)。ハリスンの学校の学生たちにとって日本で活躍する女性宣教師たちの講演は、遠いアジアの地での宣教や教育の使命を鼓舞する機会であり、その教え子である高森やグレース・イーの存在は、日本で基督教保育を担う新しい世代が育っていることを印象付けるものだった。

高森はその後コロンビア大学へ行き、1918年に無事に日本に帰国したことについて書簡を送っている。記事によると高森は「コロンビア大学を卒業し、7月22日に日本に帰国しました。ミス・ハリソンは彼女（高森のこと）から素晴らしい旅路だったと伝える手紙を受け取りました。彼女は3年前に（日本で）残してきた仕事を始めることを楽しみにしているそうです。（高森の手紙には、）私はアメリカで習った考え方や原理を適用する前に、その状況を学ぶ必要があると思います。と伝えている」 (*New Bulletin*, vol.4, no.2, 1918.) とあり、高森が日本での保育実践の再開に向けた意欲とアメリカでの学びを慎重に日本の文脈と照らし合わせようとする姿勢を生き生きと伝えた。その後、高森の名前は1920年以降のベーカー校長宛てのナニー・ゲーンズの書簡にしばしば登場する。高森はランバス女学院の頼もしい教員として、その活躍を紹介している<sup>18)</sup>。

なおこの時期には、広島女学校のマーガレット・クックもハリスンの学校を訪れたようだ。学内誌は1917年12月にクックが訪問したことが伝えられ、アニー・ハウとの関係を紹介していた (*New Bulletin*, vol.4, no.2, 1918.)。進歩主義者であったクックは、数度にわたってコロンビア大学でパティ・スミスらに学んだが、ハリスンの学校も訪れる機会があったことは興味深い。彼女がどのような経緯で訪問したのかは今後の筆者の課題としたい。

また1918年にIKUの年次大会に出席した頌栄保母伝習所出身の和久山キノは、その年のハリスンの学校のサマー・スクールに参加して以来、1919年～1923年までハリスンと親しく文通した記事が学内誌に掲載されている。和久山はハリスンと直接交流できた数少ない日本人保育者として注目

されたのか、当時の学内誌は、サマー・スクール参加後の和久山のアメリカ滞在の道程や帰国後の様子、家族のことなどが掲載されている。また記事には帰国後の和久山が、ハリスンから直接アメリカで出版されたばかりのハリスンの書物を送られたので、早速頌栄保母伝習所の授業に取り入れたと伝えた<sup>19)</sup>。和久山からの書簡は、ハリスンの保育思想が遠い日本の保育者養成に根付いていることを読者に印象付けるものであった。

## (2) ベーカー校長時代の日本からの書簡

1920年にハリスンが校長を引退し、ベーカーが校長になるとハリスンの学校は拡張期を迎えた。第一次大戦後のアメリカの好景気によってハリスンの学校は在籍者数を伸ばし新校舎の移設や、ナーサリー・スクールや初等学校が併設された。1927年からは4年制コースを設置し、幼稚園教諭および初等学校の教員資格と、学士を取得できる女子高等教育機関として整えられた<sup>20)</sup>。この時期(1920年～1939年)になると、先のグラフで示したように留学生数が伸び、ハリスンの学校には日本、中国以外にヨーロッパ、フィリピン、インド、中南米など多数の国の出身者がいた。そのため留学生のためのインターナショナル・クラブが創設され、学内誌にはしばしばインターナショナル・クラブの活動が報じられ、海外からのゲストも参加した様子が伝えられた。また学内誌は、「ナショナルとともに世界を巡る」'Round the Globe With National' (*Our Guidon*, vol.10, no.3, 1931.) や「国際化するナショナル」'National becoming international' (*Our Guidon*, vol.12, no.3, 1934.) と題して多くの卒業生がミッション団体に派遣されて中南米やアジア圏で幼児教育を実践する報告を掲載した。ハリスンの学校はまさに国際性に満ちた学校へと変化した雰囲気の中、ゲーンズはハリスン亡き後も変わらず、ハリスンの学校に書簡を送り、学内誌には記事が掲載され続けた。その内容はハリスンの学校の国際化に 대응しようとするものへと変化している。1923年の記事にはゲーンズは系列学校であるランバス女学院が無事に設立し、その経営が安定したことを伝えながら、かねてから考えていた自身の思いを綴っている。「…私は韓国や満州、中国や他国の(我々の)卒業生を訪問して、孤独な場所にいる人々が共に絆を感じてもらえるよう組織を作りたいと考えています。私はカレッジ・ホームにいますが、カレッジにすることが私の日本での仕事ではないと思うのです。(*Our Guidon*, vol.2, no.5, 1923.)」また1928年の記事には、広島女学校の付設幼稚園や中等学校にはアメリカの排日主義政策から逃れて帰国した大勢のアメリカ育ちの日本人の子どもが在籍していることを伝え、広島女学校では子どもを通じて国際精神を育みたいと報告している (*Our Guidon*, vol.7, no.1, 1928.)<sup>21)</sup>。

ベーカー校長時代には、ゲーンズとともに東洋英和女学院のレーマンの書簡も多く掲載された。レーマンは、1920年代にベーカーが校長を務めた時期の卒業生の一人であった。レーマンは1922年にハリスンの学校に学び日本に渡って静岡英和幼稚園に勤め、その直後の1925年～1946年まで恩師ベーカー校長と親しく文通を続けた。1930年の学内誌には、レーマンは1928年にシニア・コースを卒業し、1929年夏に日本に戻り静岡の幼稚園で働いていると記している。「私の仕事は9人のかわいらしい日本人女性保育者と三つの幼稚園を監督することです。彼女たちは高校を卒業しその多

くが東京の我々の保育者養成校で2年間の幼稚園教諭としての訓練を受けました。…キリスト教主義の学校と幼稚園への支援をしてくれる人がたくさんいます。…私は小さなナーサリー・スクールを始めることができそうです。ここには孤児院があり、小屋を作る計画に取り組んでいます。我々にとっては乳児のための本当にすべき仕事をする機会となるでしょう。」

(*Our Guidon*, vol.9, no.1, p.14, 1930.) と述べている。まだ日本にはなじみのなかったナーサリー・スクールや孤児救済事業を始めた様子を報告している。

その後レーマンはJKUの副議長としても活躍し、1932年夏にバーカーをJKUの招待し、来日をエスコートしている。その様子についてレーマンは「バーカー姉妹—二人の素晴らしい姉妹」という言葉は、彼女たちの訪問以来私がいつも耳にした言葉ですが、一を日本にお迎えできたのは素晴らしいことでした。…日本は大いに誤解を受けているように見えますが、友情を必要としています。軍事教育はここではあらゆることで問題を引き起こしていますが、ミス・バーカーが会った多くの日本人教師が平和を切望し、我々のように国家間のより良い理解を求めていることを私は確信しました。私はこの夏の彼女たちの旅は世界平和のために大きな助力となると感じています。」(*Our Guidon*, vol.11, no.3, p.12, 1933.) と述べ、バーカー姉妹の来日の国際協調の意義を強調した。学内誌には、バーカー来日以来、日本からの訪問者や留学生に関する記事が増えている。1932年にはその年の11月のインターナショナル・クラブの昼食会には自由学園の羽仁もと子とその娘や、女子学院のハルゼーが、インターナショナル・クラブのゲストとして迎えられた様子が伝えられた。(*Our Guidon*, vol.11, no.3, p.13, 1932.)。

また1930年代はレーマン以外の東洋英和女学校の女性宣教師が次々と訪れている。1930年代初頭には、東洋英和女学院の幼稚園師範科がちょうどカリキュラム再編期であったこともあり、彼女たちのハリスンの学校での学びは、帰国後の保育実践や保育者養成において大いに期待されるものだったようだ<sup>22)</sup>。学内誌には1933年～1934年にハリスンの学校に学んだと記されるメアリ・ステープルスの書簡には、その前年にハリスンの学校を訪れ帰国した「ファーン・スクルトンは、ナショナル（ハリスンの学校のこと）で学んだことを精力的に保育実践に導入しようとしている」(*Our*



写真1. 学内誌 *Our Guidon* のインターナショナル・クラブに関する記事。左端の着物姿の女性が功刀嘉子である *Our Guidon*, vol.12, no.3, p.12, 1934.

Guidon, vol.12, no.3, p.13, 1934.) ことを伝えている。またレーマンは1933年に留学した功刀嘉子がハリスンの学校で学士号を取得して帰国し、日本に戻ってくることを楽しみにしていると伝えている (Our Guidon, vol.12, no.3, p.13, 1934.)。

それだけではなく、学内誌は彼女たちが学内のインターナショナル・クラブで中心的な役割だったことを報じている。1934年当時のインターナショナル・クラブの会長はエレノア・ジョストが務めたが、その前年度の会長を務めたのは当時4年制の教育学学士コースに在籍した日本人保育者の功刀嘉子であった。記事によるとインターナショナル・クラブでは、日本、フィリピン、ハワイ、中国、インド出身の留学生が自国の保育事情についてシカゴ大学やそのほかの場所でアメリカ人の学生たちが議論する集会が度々開かれ、シカゴに集まった様々な国の人々と交流しながら、他国の保育の在り方を学ぶ機会を留学生たちに提供していた。このクラブの活動内容について、帰国直前のメアリ・ステープルは「来週には日本に向けて出発しますが、出発の前にナショナル（ハリスンの学校）で過ごした日々のなかで、インターナショナル・クラブがどれほど私にとって意義深いものであったのかをお伝えしたいです。素晴らしい組織でした。」(Our Guidon, vol.12, no.3, p.12, 1934.) というコメントを残している。当時のハリスンの学校が、アメリカ内外の学生と卒業生を通じた国際的な文脈のなかで保育者養成を行っていたことが伺え知れる内容である。

## 6. 考察

本論文ではハリスンの学校を訪れた女性宣教師や日本人保育者の受け入れ状況を示しながら、ハリスンの学校の学内誌の書簡を通じて、留学を通じて行われたハリスンの学校と日本との国際的な交流の一端を明らかにしてきた。今後は留学生それぞれの学びに注目しながら帰国後の日本における保育実践史との影響を含めた検証を筆者の今後の課題としたい。そのうえで、本論文で検討した内容から、ハリスンの学校と日本とのつながりの特性について、日米双方向による保育者たちの交流を通じて作られたトランスナショナルなネットワークについて、以下に試論的な考察を行いたい。

まず日本からハリスンの学校へ留学生を送る流れ (flow) は、ハウとハリスンの小さなつながりから生まれ、1890年代から1930年代までキリスト教主義幼稚園のネットワークを活用しながら、日本からの様々な留学生が、代わる代わる訪れる循環が生み出された。これらの留学生たちは、ほぼ女性宣教師で占められ、一時帰休による滞在期間は数か月間から3年未満と短く、ゆえに数度の留学を繰り返すという留学を行っていた。希少な例であるが、高森や功刀のように日本では取得の難しい学位取得を目指した日本人保育者が3年間以上の留学を経験し、日本人が直接ハリスンの学校と交流を深めた例も確認できた。これら留学生たちがハリスンの学校を訪れることによって、留学生個人の小さな文化的交流の絡まりは、数珠のようにつながり、日米間の保育の文化交流の循環を生み出したように見える<sup>23)</sup>。その現れは学内誌に掲載されたゲーンズ、レーマンなどの世代を超えた文通者の筆を介した日本からの書簡に見いだせた。書簡の内容は、ハリスンの学校での学びを経たそれぞれの日本での保育実践を伝えると同時に、保育における国際交流や国際協調の意義を確かなものにしようとする文脈も読み取れるものであった。



一方で、日米間のネットワークにおける保育者の循環は、留学生を受け入れたハリスンの学校の文脈からも構築された。学内誌に語られた記事からは、ハリスンの学校の人々が遠いアジアの宣教と幼児教育の発展を伝える語り部として彼女たちを歓迎し、自らの同窓会コミュニティに迎えることで、帰国後の彼女たちはハリスンの保育思想や実践を海外へ伝えた伝播者であり、そして保育者による国際交流の担い手として受け入れた。1920年代に創設されたインターナショナル・クラブは、ハリスンの学校のトランスナショナルなシフターフッドの一面を象徴している。本論文では十分に取り上げられなかったが、インターナショナル・クラブの創設や、ベーカーが来日した戦間期は、第一次大戦を契機に当時の女性同士の国際交流運動が高まった社会的背景と機を同じくしている。例えば、ハリスンの知古であるハル・ハウスのジェーン・アダムズが1915年に開かれたハーグ国際女性会議のリーダーであり、ヨーロッパ、アメリカ、アジアの女性たちをつなぐ国際平和運動を主導し、戦間期において国際連盟の文脈に則った女性たちの様々な国際平和運動に影響を与えた<sup>24)</sup>。ハリスンの学校がどのようにこの文脈を取り入れたのかということは今後の筆者の課題であるが、1914年のハリスンの講演に関する記事からは、彼女が第一次大戦の国家間の闘争状態に対して、キリスト教を信奉する女性保育者の立場から理性をもって向き合うべきだとする文脈を見出すことはできた。こうした国際的な女性運動から間接的な影響を受けて、ハリスンの小さな女子カレッジの同窓会ネットワークが、戦間期の国際協調を意図するトランスナショナルな文脈を含みながら、宗派や所属、国境を越えた保育を担う女性たちの日米の連帯を深めることになったのは想像に難くない。これこそが、留学がもたらした両国における知と文化の交換の結果とみることができだろう。

#### 脚注・参考文献

- 1) Barbara Beatty., *Preschool Education in America*, Yale University Press, 1995. 橋川喜美代『保育形態論の変遷』春風社 2003年
- 2) Japan Kindergarten Union(reprinted), *Annual reports of the Japan kindergarten union (1907-1940)* 日本らいぶらり1985年、小林恵子『日本の幼児教育に尽くした宣教師』下巻 キリスト新聞社2009年、熊田凡子『日本におけるキリスト教保育思想の継承』教文館2022年、頌栄幼稚園におけるハリスンとの交流については、野尻美枝「19世紀後期～20世紀初頭のアメリカにおける保守進歩派エリザベス・ハリソンの幼児教育とその意義」『幼児教育史研究』第15巻 2020年、野尻美枝「明治・大正期のキリスト教主義幼稚園における保守進歩派エリザベス・ハリソンの影響：頌栄幼稚園を中心に」『上智大学教育学論集』第56巻2022年を参照した。
- 3) Ann Taylor Allen., *The Transatlantic Kindergarten: Education and Women's Movements in Germany and the United States*. Oxford. 2017. p.6. アレンの言う「絡まった関係」とは、文化的な転移は一時的なもので終わるものではなく、また一方向に操作されるものではない、国境を越えた交換における複雑性を意味している。
- 4) アレンは「トランスナショナル」とは、「公的な政府や組織構造の外にある人々や様々な考えが、国境を越える多くの手段—わずかに例を挙げれば、移住、旅行、知的交換、制度上の協調、出版、通信、会議などがあるが—を通じて発展した諸関係性」を含む意味合いがあると述べ、「そのような諸関係性は、物質的な条件や個人の経験の両方を形作る」ことに注目している (Allen 2002 pp.5-6)
- 5) 橋川喜美代『保育形態論の変遷』春風社2003年p.217
- 6) Elizabeth Harrison., *Sketches Along Life's Road*. The Stratford Co. 1930. pp.60-91、pp.117-130
- 7) 野尻、前掲論文、2022年 pp.4-7
- 8) National Kindergarten College., *Our Guidon*, vol.13, no.3, 1936 pp.8-9



- 9) Edna Dean Baker., *An Adventure in Higher Education. National College of Education*. 1956 pp.109-194
- 10) 野尻 前掲論文 2022年、橋川、前掲書 2003年p.217
- 11) 野尻、前掲論文2003年p.97
- 12) 永井優美『近代日本保育者養成史の研究』風間書房2016年 pp.293-322
- 13) 北野幸子「世紀転換期アメリカにおける幼児教育専門組織の成立と活動に関する研究:領域の専門性の確立を中心に」  
広島大学 博士論文 2001年p.124
- 14) 北野、前掲論文、p.201
- 15) Japan kindergarten union (reprinted), 'Twenty-Sixth Annual Report of the Kindergarten Union of Japan, KARUIZAWA, JULY 1932'. pp.45-52 日本りぶらりあ、1985年
- 16) National Kindergarten College, 'Governing Board 1933 honorary member' in *Course Catalogue*. p.73.
- 17) ハリスンの講演の要約が掲載されている。ハリスンは戦争は「地獄」であるとよく定義されると述べ、理性ある女性として現状をどのように見なすべきかを聴衆に呼びかけた。曰く、戦争の歴史は国家や人々、階級が他者の自由の権利を尊重せず、正義の側が征服することにあると述べた。ハリソンは、「我々はこのカレッジで、人間には世界を変えることのできる神聖な要素 (Divine element) があること、そして人間とは限界を超えることができることを学んでいる。子どもはこの無限の力を備えている。…我々は子どもの精神的な環境、物質的な環境を組織化し、最終的には寄託者、すなわち神について組織化することに立ち戻っていくのだ。我々は宗教なしでは真の理性的な人間ではありえない。我々は人類にとっての洞察と信念と理性のためにここに集っているのだ。」(*New Bulletin*, Vol.3, no.2, 1915.)
- 18) ナニー・ゲーンズは「日本の女子教育は益々発展しています。広島の幼稚園師範学校を大阪 (ランバス女学院) に移し…ミス・高森は新しい学校を一番よく理解しています。」(*Our Guidon*, vol.2, no.5, 1923.) と書き送っている。
- 19) 和久山キツは「ハリソン先生、直々に私へあなたの新しい本を送っていただいたことを大変誇りに思います。学ぶべき価値のある本です。」(*Our Guidon*, vol.9, no.1, 1922.) と書き送っている。
- 20) National Kindergarten College, *Course Catalogue*. p.28. には、いくつかの州や多くの都市では、初等学校教員の学位要件に繋がる 4 年制コースを設置されたと記述している。また学士の学位は教員養成カレッジでの重役や主任を望む教員には最低限求められるものであると書かれている。
- 21) 「我々の学校には50人のアメリカ生まれの日本人が…幼稚園からカレッジまで在籍しています。彼らはもはや日本人というよりアメリカ人です。多くの子どもがアメリカの高校を出た後、日本に戻ってきても日本語がうまくないので初歩クラスや文法クラスから入学します。なぜ子どもたちはアメリカから引き返してくるのでしょうか。…(近年の日系移民の) 法律は厳しいもので、(日本人の) 農夫は (アメリカで) 生活することができません。彼らには貯金もなく他に仕事がありません。それで彼らは家族を (日本へ) 送り返しているのです。…私は子どもたちを通じて国際精神を作りたいと思います。わが幼稚園には韓国の子ども、二人のロシア人、一人の中国人、そしてアメリカ人がいます。Grace Yeelは数年前にNCKをでしたが、わが校の学生でもあります。アメリカが国際的な友情を求めて、移民法をすべての人民に平等なものに改正してくれることを願います。」(*Our Guidon*, vol.7, no.1, 1928.)
- 22) 東洋英和女学院百年史編纂実行委員編『東洋英和女学院百年史』東洋英和1984年pp.224-227によれば、ステーブルスは1931年に幼稚園教諭師範科主任としてカリキュラムに進歩主義的なリトミックの講習会や栄養・衛生などの特別講座を取り入れ、1932年に一時帰休したとある。(なお彼女がハリソンの学校に在籍したのはコース・カタログによれば1933年-34年である。) 次に主任となったレーマンは生理衛生・栄養学の学科目を新設し、保育科目に恩物・手芸というフレイベルの中心的教材のほかに児童研究とリトミックを加えた、とある。このカリキュラムの再編とハリソンの学校とのつながりについては今後の筆者の課題としたい。
- 23) グッドマンはマイケル・ゲイヤーの言葉を引きながら、トランスナショナルな循環レジーム (transnational circulatory regime) は空間的レジームの一部で、国家権力のような公権力に埋もれてしまうような、諸地域や諸グループ間のダイナミズムを可視化できると述べる。また循環的レジームは、社会的実践を規制するフォーマル又はインフォーマルなルールの束を含み、社会的変化が相互依存 (interdependence) と共同制作 (co-production) の結果を生む様々な在り様を示すという。ジョイス・グッドマン (訳) 香川せつ子、内山由理、中込さやか「イギリスにおける教育史研究の潮流：ジェンダー、トランスナショナリズム、エージェンシー (原題：'Research trends in British

history of education : Gender, transnationalism and agency')』『西九州大学子ども学部紀要』西九州大学子ども学部、第8巻、2016年、p.100. Michael Geyer, 'Spatial regime' A. Iriye, P. Saunier (Edited), *The Palgrave Dictionary of Transnational History: From the mid-19th century to the present day*. Palgrave Macmillan. 2009, pp.962-6.

- 24) 1915年4-5月にオランダのハーグで開催された国際女性会議は平和的手段の国際紛争の解決、女性参政権獲得による政治参加と平和構築、中立国の役割の確認と継続的調停による戦争の終結、国際的な調停組織の形成、民族の尊重等を議決した。この会議をきっかけに1919年に婦人国際平和自由連盟 (Women's International League for Peace and Freedom) が誕生した。アダムズは初代リーダーとして、各国の女性団体とともに第一次世界大戦中及び戦後の平和構築や国際協調を提言した。サンデルによれば、このような女性団体による国際的な女性同士の連帯 (international sisterhood) の思想は、共通の動機を持つ女性たちをつなぐネットワークに所属することの意味や一体感を生み出すという。Marie Sandell. *The rise of women's transnational activism: Identity and Sisterhood Between the World Wars*. I.B. Tauris. 2015, pp.7-9

# The nursery teachers in Japanese Christian kindergarten and study abroad before WW II

: Focusing on Elizabeth Harrison's school in Chicago

Yuri Ozawa

## 【Abstract】

This article focuses on the missionary women and Japanese nursery teachers from Japan who studied in the Elizabeth Harrison's school, the National Kindergarten Collage in Chicago to explore the transnational exchange on an international kindergarten movement between the U.S and Japan from the late 19th century to the 20th century. It examines how they constructed the transnational relationships by showing their writings were sent from Japan and the articles of the bulletins and newsletters in special archives. These materials show that the Christian kindergarten network in Japan and the alumni network in the NKC were intertwined and then succeeded to make the circulation regimes that Christian nursery teachers came and went between Japan and the U.S..